

會



報

昭和 17 年 11.12 月

120

日本山岳會

本會の小集會に就て

沼井 鐵太郎

山好きが片手間に事務を取るんだから間違ひや脱落は御愛嬌などいふのは、もう舊體制下の話で、どうも拙稿拙字の所爲もあらうが本誌編輯常事者が傳統的に正誤表を怠り勝ちなのは、自分としては非常に不満である。

冒頭からかう言つてしまつたんでは、小集會の何をしゃべるんだと御叫びを蒙るに違ひないが、實は其の番號に就いての事が第一用件だ。近頃小集會の通知でも會報所載の記事でも第何回と明記してゐないのは、歴史ある本會の立場として甚だ淋しい。然し番號が無くなつたのはそんなに古い時代ではないので、會報九九號八頁を見ると、昭和十五年十月十日日本橋商工俱樂部で催されたのは第九十六回小集會で、小集會番號は、第八十回小集會開催の折誤つて第八十一回としたので、爰に訂正する次第」と註釋してある。ところが其の後がずつと無號なんである。正確に今度の小集會は第何回目か之を定めるには小集會史を充分に検討研究した上でなければ出来な

いが、假に上記九十六回を基にし

行くと、昭和十六年六月二十五日堂ビル清交社で催した關西支部小集會が九十七回(會報一〇八號)、同年十月三日日本橋商工俱樂部で催した秋季小集會が九十八回(會報一一一號、山岳三十六年二號)、昭和十七年六月二十四日日本橋商工俱樂部で催した小集會が九十九回(本稿執筆時尙未發表)、其して來十一月十一日開催豫定のものが第一〇〇回といふ事になる。

偕て此の百といふ數字を見ると何か記念講演を願ひたい氣にもなるが、其の百の持つ意義を如實に考へて見ると、中々問題である。大體自分の氣持からいふと、會合には場所といふものが日附の次に大切である。昭和十年四月十日大阪堂ビル清交社で開かれた關西の小集會に、第六十六回と番號を續けてしまつたのがまづい。關西小集會は其れ自體獨立回數を附して行くべきであつたと思ふが、當時本會の大勢はかういふ意見と將來の混亂は考慮されてゐなかつたと見へる。尤も黒田君の書いた「日本山岳會三十年」には「……尙小集會は年六回の内四回は東京で二

回は關西で催すことになり、第一回の關西小集會は昭和六年に開かれてゐる」とあつて(山岳三十年二號【昭和十年十二月三十日】附録三〇頁、同上附録日本山岳會誌一九〇六—一九三五参照)、小集會の開催を關西にも定期的に、行事を主眼としたものゝやうであるが、昭和六年第一回といふのと第六十六回(關西)といふのと關聯がない事は、本會記録及び編輯上の失態であらう。

其處で結論をいふと、日本山岳會小集會といふのは東京でやる小集會の事で、此は番號を今更既往に遡つて改めると更に混亂を來すからやはり此の十一月に開かれるものを第一〇〇回とする。又、關西で行ふ分は關西支部小集會として別に番號を附けてもらふ。以上は役員會で打合はされた事柄である。然し關西分の今後を改めて第一回とするか過去からの累次番號にするかは、支部の方々と共に研究して見たいと思ふ。

第百回決定所以の物語では誠に一般に對して興味がないので、少し小集會の事に就て書かしてもらう。

抑々本會小集會が發會したのは大正七年九月一日東京で當時の近藤幹事の經營して居られた保々近藤合名會社の事務所であつた。

の時の司會者は現會長の木暮幹事講演は同年夏山の旅行談を木暮さんがなされた事が記録に残つてゐる(山岳十三年一號)。次で第二回は同じ場所同年十二月三日開催、會の出版物(山岳)には何も記録はないが、多分田部重治さんが話されたんだらうとの話、續いて第三回、第四回と同じ場所であつて、第五回大正八年九月七日から麹町區清水谷皆香園で、いつも日曜の午後から開くやうになつた。以後今日迄皆香園で催した回数、最多であり、第二十二回大正十二年六月十日日枝神社境内「やまと」で行つたのを除いて第三十八回昭和二年十一月二十七日迄及び三會堂時代に移つてからも第四

(六頁へ續く)

目次

- 一、本會の小集會に就て……………一
- 一、圖書紹介並隨筆のこと……………二
- 一、登山年譜資料管見(二)……………三
- 一、學校山岳部欄……………五
- 一、「山の繪の會」展覽會……………五
- 一、會員通信——吉澤一郎、笹田泰治、月原俊二、橋本三八……………六、七
- 一、小集會記事 關西支部小集會(六十回)第百回小集會……………八
- 一、第一回有志懇談會……………九
- 一、會務報告……………一〇

會報の圖書紹介 並に隨筆のこと

田邊主計

日本山岳會刊行の「會報」の記事にはその合本總目錄の分類に據つて見れば論説、隨想、研究、紀行、通信、調査、消息、圖書紹介、集會記事、會務報告等があるが、是等の内圖書紹介を好んで讀む人も少くない。それは一つには山に登る人々の中には書物を愛好する人が多いからであらう。登山は體力の實踐的な行爲であるが同時に又多分に思想的な處もある。山に登る人々は山岳に關する書物をたゞ案内記として讀むだけではなく、又その愛讀するものも登山に關するものに限られてはゐない。日本山岳會の會員のうちにも讀書を好み又幾冊かの書物を愛藏してゐる人が多い。先年の山岳圖書展覽會もそれらの人々が中心となつて催したものであつた。(この展覽會の出品圖書目錄は會より刊行されたが、一つ一つの本について説明も付いてゐて山岳に關する代表的な圖書がどんなものであるかを知る事が出来る有益な冊子である)また松方氏の著書「アルプス記」の中の「山岳圖書展覽會のため」に「書問逍遙」等のうちに

も是等の事柄について述べられてゐる。

我々は他人の説に頼らずに自分で書物を撰んで来て側に置きたい。しかし見逃すこともあるし又到底その全部を讀むことは出来ない。「讀書術」(エミル・ファゲ)によるまでもなく讀書に必要なことの「一つは「ゆつくり讀むこと」であらう。(讀書のために與へられる時間の少ない人々は斯様にしてはその一生に果して幾冊の本を讀み得るか、しばしば焦躁の念を抱くことであらう)。この場合、「圖書紹介」は役立つ。我々はそれによつて本の内容を知り良否も知り得る。そして讀みたい(又は讀みたくない)といふ心持ちになる。

書評に就ては屢々論じられてゐるが、その要件として中島健蔵氏が述べられた所を簡単に記せば左の通りである(日本讀書新聞昭和十六年十一月十七日號)

(一)書物の内容の紹介 その本だけに止まらず、同じ著者の他の著書、著者の傾向等にまで考へを及ぼす

(二)内容の批評

(三)書評自體が興味ある讀物になつてゐなければならぬ。評者の呼吸が感じられ、書評だからからも感動を與へる處がなければならぬ。

私も書評を好んで讀むものゝ一人であり、同時に自分でも、なるべく書きたいと思つてゐるのではあるが、以上の要件などを考へると、之はなかなか私にとつてはむづかしいことである。殊にその作家の他の著書や傾向等つまりその人の歴史までも考へるとすれば急には出来ないことになる。餘り大事をとつては新聞の紹介を怠つてしまふことになるから、とりあへず、山岳に關しどんな書物が刊行されたかといふ記録を残す意味からも簡単な内容紹介だけでも主要な新刊書については會報に記載されることを望むものである。

山に關する書物や又それらの翻譯書にも粗惡なものがあるが、それらを容謝なく批評することを望む人が多い。中島氏も「書評による論争はもつと行はれてもよい」と述べてゐる。明らかに「良くない」ものは「良くない」と言はれた方が許される方も教へられ、有難いことではないか。

「新刊紹介」と共に「舊刊紹介」もあるとよいといふのが私の説である。山岳に關する「古典」となつてゐる書物や以前出版された書物もそれを愛讀した人々によつて更めて紹介をされれば我々にとつて随分爲になることであらう。私

自身「會報」のために數回「書評」を書いたが、そのうち一二のものは編輯者の依頼によつただけではなく自ら進んで書いたものであつて、それを書くことが私には樂しかつたことを記憶してゐる。そのせいか、どうか解らないが、それを讀んで原著書を読みたくなつたと言つた人も二、三人あつた。

次に「隨筆」について林達夫氏著「思想の運命」(昭和十四年刊)の中の「隨筆文學について——一九三七年の文藝出版物」の一部を此所に引用したい。之は近頃所謂「隨筆」を讀んで屢々一言ひたくなる私にとつて會心の言葉だつたからである。

「隨筆といふものはわが國の社會的風土によくよく合つた文學的特產物だと見えて、今年もこのジャンルに屬する出版物の刊行は、統計を調べてみると月々たいがい二十種は下になかつたやうである。……一體どんな考へで、誰に讀ませるつもりでこんなものを書いてゐるのか、作者の圖々しい、氣な態度に腹が立つ……私人的なその話し振りが好まないが、何よりも生活の斷片的な月並な欄外が不愉快である。いかにも生活が豊かさうでゐて、その實、貧しい。精進よりも安住が、共感よりもひとりよがりさがさばり出て

ゐる隨筆を書く「餘裕」の性質がひどく氣になる。……隨筆の専門家などが存在できるといふそのことが、そもそも何事にもその専門、その「天職」に徹することのない我々の中途半端な生活、分業化の至つて幼稚な社會の「間隙」を示してゐる。隨筆とはかういふ間隙の生活を培養土とする中途半端と彌次馬的多情とを特色とするジャンルと定義しては云ひすぎであらうか。……と述べ、さらに「科學隨筆」について「この頃はやりの科學隨筆ほど科學精神から隔つた、生活を餘白化したものもない……」と評してゐる。

所謂「山の隨筆」は同氏の目にふれなかつたか或ひはさういふ方に關心をもたなかつたか、右の言葉はそれらを相手としてのものではなかつたやうであるが、近來さかんに刊行される「山の隨筆」なるものに接するたびに右の言葉を想出す。いつか「山の隨筆」の書評でも書く機會があつたら之を持出そうと思つてゐたのであつたが、その本に對して言つた言葉となるよりも、それら多くのもの一般への言葉としてここに引用したかつたのである。もとより優れた隨筆は多くの人々に喜ばれるものであるが、また、私もいつかは山について見事な隨筆が書けるやうになりたいと夢みてゐるのであるが右の言葉は私自身への警しめとなるものである(一七年一月)

登山年譜資料管見(二)

沼井鐵太郎

本誌一一二號(昭和十六年十一月)に管見(一)を掲載し、長野中尉の新高山探險、邦人の臺灣高山山地に於ける第一の記録、阿里山森林の發見、新高山舊名のモリソンに就て、次高山探險企畫者マツケイ氏の事、昭和十六年夏季臺灣高山山地の記録、濟州島漢羅山の初登記録、と七項に就て寸記したが、年譜の出来上つたものを御見せしない前に管見録を出したわけは、初めに書いた通り同好諸士の教示批判を仰ぎたいのが主目的である。未だ叫正の反應が現れないのは淋しいが、若し半年も一年も何等の駁論が出なかつた場合には、年譜委員の合議研究により是非を定めるより外にない。相成るべくは會員全部が當事者の心になつて完成に歩一歩近づきやうにしていただきたいのである。

今回は主として登山年譜の調査方法と明治四十年を一例に取つて少しばかり其の試みを諸君と共に研究して見たいと思ふ。

○登山年譜の調査法

筆者が關係するやうになつてからこの方の方針は、何山といはず

文獻涉獵の一齊進撃をして先づ基本カードを作成分類整理しやうといふのである。其の理由は成るべく記録の落ちを少なくする事である。なほ調査に従つて色々の慾望も生じたが、此は今の處申し上げない事にする。

基本カードで大體調査したものから着手して次に資料を書き上げる。斯くて合成された資料(年度を軸とするか地域を軸とするか未定)は未だ検討訂正補足を經てゐないから、成るべく多くの委員の手によつて之を精製する。最後に之を純粹の意味の年譜と説明書に形を變へ、出來得べくんば文化史的總説を加へたいのである。

「資料」迄の實際方法を更に具體的に言へば、先づ年度別に調査を始め、各年度内便宜上の地域別に分つ。日本領土内登山記録は内外人を問はず、本邦領土外は本邦人の記録を主眼とする。基本カードには山名(又は地域名)季節、登山探險調査研究者、案内人夫の有無及所屬、路順行程大要、引用文獻其他出所(聞き込み等)等を記すが、文獻は標題を讀み記すのみにとゞめず各項を要領よく仔細に檢し文中他山の記録又は事象に注意して其の發見の都度新たに基本カードを作製するのである。尙又二年以上に渡つた登山探險記

録は何處に置るか目下検討中だが今の處筆者は最終年度の所て整理してゐる。年度不明又は疑問のものは大凡の年度に假整理し「要調印」を附して置く。又登山實踐の記録を主とする事は勿論であるが一般地理探險又は旅行でも廣義探險史上重要と認められるもの、例へば間宮林蔵氏の事蹟の如きものは本年譜に盛る事にした。尙同様に例へばヘットナー石發見や飛彈山脈、新高山の命名の如き、又山岳高度位置測量結果の公表など學術的意義を持つものも録する事にした。其他委員間連絡上カード整理上種々の約束を定めたのである。

大變は大變だが、實踐的にヒマラヤ高峰にぶつかる意氣込みで本事業を進めて行くつもりである。只遺憾な事は委員が皆有閑ならざる公職を他に持つ社會人又は學徒であるので完成を期待する側から言つて、甚だ頼りないかも知れない。然しさういふ際には寧ろ自ら進んで筆者等の陣營に加はる特志家をこそ望むのである。若し筆者にして他日書店から頼まれて登山史を物したとしても、其れは恐らく中間報告にしか過ぎないであらう。其れほど迄にやり甲斐ある畢生の仕事である。時局下にも一つ言はしむれば此の日本登山年譜編纂により我が民族發展を顯現し將來の希望を明くしたいと切に思ふのである。

○明治四十年(皇紀 二五
六七年、西曆一九〇七年)

日本登山年譜資料

【北海道の部】

マタカムウシユベ山——「七月上川中學校教諭安藤秋三郎及同校生徒(何)名忠別川の上流より菊地小屋?」を経て山頂に達す。

——此は少くとも學校團體としては恐らく最初の大雪山登山であらう。尙又植物採集探險登山の嚆矢でもあるやうだ。博物之友四八號(明治四十一年一月)一三一八頁武田久吉「マタカムシユベ山の植物に就きて」、山岳四年三號(明治四十二年十一月)一四四頁參照。上川中學校の同窓會雜誌のやうなもの又は當時の印刷物か土地の新聞記事でも一覽して行の詳細を知りたいものだ

【奥羽の部】
恐山——「(何)月、志村島嶺、山岳二年三號(明治四十年十一月)一七三頁。
八甲田山——「(何)月、植物採集。——土田俊郎。博物之友六一號(明治四十二年四月)六一頁。『七月飯柴永吉、植物採集、青森より酸ヶ湯經由往復、山岳三年一號明

治四十一年三月)二〇一、二二一頁「八甲山岩木山岩手山登山案内及其主要植物」。

岩木山——「八月一二日、飯柴永吉、案内者あり、弘前より百澤一泊往復す、同上文獻——「八月、志村島嶺、山岳二年三號、一七三頁。

岩手山——「八月四七日、飯柴永吉、植物採集、盛岡―柳澤―岩手山―ハッ眼―御釜―柳澤、文獻上記。——「八月、外人一行。山岳二年三號(明治四十年十一月)一三四頁に「外人の一行は此小屋(諏訪小屋)にて休息し……」とあり、外人が何人なりしや不明——「八月二〇―二二日、志村島嶺、柳澤―不動平ノ小屋―絶頂―小屋―ハッ眼―御釜―御苗代―大地獄―網張温泉―柳澤。山岳二年三號一三一―一三八頁及三年一號(明治四十一年三月)一―一八頁「奥の富士(岩手山登攀記)」。詳細なる登山記事として注意すべし。——「尙志村氏紀行によれば盛岡地方の信仰登山形式及登山期(舊曆五月十五日―九月五日)、祭日(五月二二―二七日)、女子登山も抄からざる事、登山者數(盛岡御神坂のみにて一箇年約二千人内外)等を記し岩手山同時代の登山一般を知る。——「同様志村記載により、徳川時代士族及女子の登

山禁示、明治八年某女子九合目迄の登山ありし事及び明治四十年の十四五年前に雪多き舊四月頃單身登山して行衛不明になつた事や、中村某の山上死歿の事等を知る。皆要別調の事項であらう。

島海山——「八月二二、二六日、導者時田茂吉（四十歳、藏岡、飯豊山、月山登山後手向より藏岡に泊り行者堂及新山に各二泊後吹浦に下る、山上滞在は暴風雨の爲なり。山岳二年三號一七三頁、同四年二號（明治四十二年六月）一八二九頁「島海山（出羽探山の三）」詳細な紀行で荒天の際近代先輩登山家の登山精神及形式を知る典型であらう」（何）月、河東碧梧桐、山利郡矢島町一新山巡り。同氏著「日本之山水」（大正四年七月）三一・一三三〇——「大平氏紀行により本山登山期（陰曆六月一日—八月八日）及登山者數（一年約五六千人）を知る。

羽探山記の二——「大平氏紀行により本山の登山期（陰曆五月下旬—八月下旬の約九十日間）及最も賑ふ時期（七月十四日より一週間）を知る。

飯豊山——「八月頃長野大林區署技手佐藤善吉一行、赤谷より登山測量に従事す。山岳三年三號（明治四十一年十月）二五及二八頁其他。事蹟未詳につき「要別調」。

——「八月一、一六日、大平歳大平園斌、佐藤國三郎（後二者は中學生）、案内者齋藤平吉（三七歳赤谷）杉原森吉（五〇歳、同上）新津——赤谷——瀧谷温泉跡——センダクタ小屋敷——御手洗池——御用ノ原——四王寺本社石室——西岳——石室——御藏所——一切合——御澤——地藏岳——岩倉——米澤、二中學生は佐藤善吉氏と同行會津口に下る。山岳二年三號一七三頁、三年三號（明治四十一年十月）一六・一三三頁「飯豊山（出羽探山記の二）」本行は飯豊山赤谷口の最切に公表せられた記録的なものであつて、後年登山界に與へた影響は頗る大きいのである。

【越後山系の部】

守門岳——「九月二十九日、荒木某、吉ヶ平より登頂ムシトリスミレを採集す。博物之友四八號（明治四十一年一月）二九頁。

八海山——「秋期、安達宣松（本

會々員）中秋の名月を賞す。山岳二年三號一七三頁——「要別調」

銀山平——「（何）月、保坂定三郎、「越南銀山に向ひて大冒険を試み銀山平に入り諸溪谷を探索する十二日に及ぶ」。山岳二年三號一七三頁。「要別調」

【關東地方の部】

那須山——「（何）月、佐藤傳藏（本會々員）。山岳三年一號一七二頁。

日光——「八月九日、伊通善四郎（本會々員）山開第一日登山（男體山）」。山岳二年三號一七四頁。

——「八月十八日、北澤基幸、T生（武田久吉！）T生は第八回女峰登山、女峰——帝釋山、——山岳三年二號一九一七頁、北澤「日光女貌山、専女山を越えて帝釋山に到るの記」、山と溪谷六三號（昭和十五年八月）、武田久吉著「尾瀬と日光」（昭和十六年九月）二七四頁。——「八月二十六日青木信光（本會々員）太郎山。山岳二年三號一七六頁。——「八月九月、山本徳三郎、赤難、女貌、太郎、白根に登る。山岳二年三號一七四頁、三年二號一三三・一三五頁「日光山岳雜談」。——「（何）月、日光淨土院住職今井順徳師一行。「稻荷川上流探検再舉をはかり初見瀑よりも更に上流にまで上つたが、終に七瀧に達する事な

くして退却するの止むなきに至つた」。武田久吉著「尾瀬と日光」（昭和十六年八月）九七頁。此の廻行は後年登攀場として有名になつた雲龍峽の登山史先驅をなす舊登山時代の注意すべき探險記録であらう。——「十月二〇—二五日河田黙、辻村伊助、那須皓、（赤城）——合瀧峠——男體。山岳三年一號一七二頁。——「十月二七—二八日、高野鷹藏、石川光春、竹崎嘉徳、案内者平野佐次郎、日光——裏見瀑——志津——湯本——奥白根——湯本。山岳三年一號一八五—五六頁「二荒のおちば（日光奥白根の記）同一七二頁。

赤城山——「六月八日、沼尻好二（本會々員）植物採集。山岳六年二號（明治四十四年七月）九八頁。

——「九月十五日、沼尻好、黒檜山頂上に登る。同上。——「十月河田黙、辻村伊助、那須皓。山岳三年一號一七二頁。

【大平洋諸島の部】

大島火山——「七月、中村清二寺田寅彦、石谷傳市郎、火山調査研究の爲の豫備旅行。地學雜誌二三八號（明治四十一年十月）六八—二六九頁「大島火山の過去及現在」同二三九號（十一月）七八—七九九頁。——「八月同上の研究一行、外輪山の内側火口原北端に天幕一ヶ月滞在。同上文獻

【上信境の部】

苗場山——「夏期、久保田巧策（本會々員）七ツ釜探險。山岳二年三號一七四頁。——「夏季夏日新治（本會々員）。同一七六頁。

「九月、大塚雲波（本會々員）小千谷——境村——苗場山（九月四日）七ツ釜——同一七四頁。

淺間山——「夏季、讀賣新聞社主催百人餘。山岳五年三號（明治四十三年十一月）五九頁。——「四十年？八月？信州小縣郡淺間登山會二百餘名、四日一八二名六小隊深井會長隊長、——菱野温泉泊、翌日一行二百餘名となり湯の平を経て登頂小諸に降る。——山岳二年二號一三九頁——「要別調」（未完）

會報遅延について

次號からは毎月會報を御届けすると、前號で御知らせしたにも係らず、又々こんなに後れてしまひまして誠に恐縮の至りに存じますこれは全く印刷の事情によるものでありまして、本號は必ず十二月下旬迄に發行するといふ堅い約束の元に原稿を渡したのですが、途中組版工が何名か徴用せられ、何もかも目茶々々になつてしまひました。目下確實な印刷所を尋ねてゐますから今少し御辛抱願ひます



學 校 山 岳 部 欄

關西學生山岳聯盟

九月二十二日「關西學生山岳聯盟第十三回總會」を六甲ハウスで開催しました。

來賓、西岡一雄、四谷龍胤の諸氏又當日客賓として來られた谷口現吉氏（慶應先輩）を中心として「探險と登山」「登山案内人の道徳」「登山家のブライド」「關東の大學山岳部のビギナー訓練」等の問題をめぐって活潑な討論が行はれ盛會でありました。

尚、聯盟役員左の如く交替しました。

舊役員
總務 土田新一（神商大）
會計 上田忠良（同志社大）

新當番校 同志社大學山岳部

總務 片岡康祐（同志社大）

會計 請川武夫（同）

右聯盟總會の御通知旁々委員交替御挨拶まで。（土田新一）

拜啓秋の候貴會益々御隆盛之段奉賀陳者今般關西學生山岳聯盟昭和十八年度當番校並に常任委員決定致候に付右御通知申上候（加盟校十九校）

當番校 同志社大學修練團練成部山岳班

庶務委員 片岡 康祐（同大）

會計委員 請川 武夫（同大）

京郵セクション委員

富久田孝一（三 高）

河村源一郎（同志社高商）

大阪セクション委員

池田 正男（大阪商大）

渡邊 修治（浪 高）

神戸セクション委員

丹治 義郎（關 學）

田部金之輔（甲陽高商）

（十月一日）

『山の繪の會』

第一回展覽會

「山の繪の會」の結成については古田彰氏が會報第一一六號に述べてゐられたが、その第一回展覽會が十一月十二日から四日間菊屋

ギヤラリーに於て催された。

出品目録によれば出品者十六名點數四十三で油繪、バステル、水繪又は鉛筆淡彩等の概して小品が多く心地よい展覽會であつた。この會は日本山岳協會とは別のものであるが、古田氏も「兄たり弟たりの關係に於て」と述べてゐられるやうに協會の方の會員である茨木氏や古田氏も世話を見てゐられ、前者よりも、もつと若く、會そのものの「寄集り」にも熱心な人々のものではないかと思はれる。即ち結成の記事にもあるやうに「山を愛し、山に登り、山の繪を愛する」人々が山の繪を書き「相寄つて」この會を結成したものである。この心地よく相寄つた人々の會が長く續くことを希つてゐる。

出品者の中に會員の茨木、古田、長島の諸氏が加つてゐる。茨木氏の出品は「新緑の鳥居峠」「鳥海の秋」「高原の秋」の三點、古田氏は「劍」「鹿島槍」「山上黎明」の三點、長島氏は「清里にて」「穂高」「劍岳」の三點である。

又その彩色のもの等は作るに面倒なものであらうか。普段あまり見かけないやうであるが、それらの小さな畫がかへつて山の美しい姿や色を現してゐることが多いやうでこれを好む人々も多い。

（一七年一月田邊主計）

關西支部編

山岳研究講座Ⅰ發刊

本會關西支部編になる「山岳研究講座Ⅰ」（十七年六月開催された夏山講習會要綱を輯録したもの）が今回朋文堂から發行されました内容は左の通り

登山の文化史

桑原 武夫

沙漠の體驗

宮崎 武夫

登山と探險

加納 一郎

山岳信仰の變遷

笹谷 良造

裝備について

諏訪多榮藏

岩登り術の基礎

水野祥太郎

定價一圓八十錢

P 6 判二百頁

會員には左記の値段段でお頒ちするさうですから御希望の方は至急左記へお申込下さい

一圓六十錢（送料共）

申込先 日本山岳會關西支部

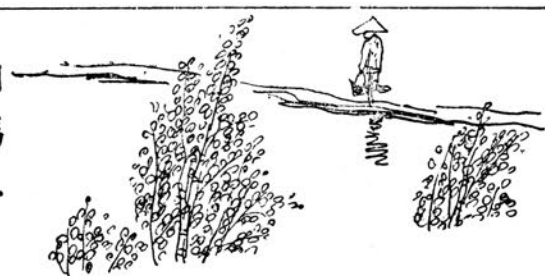
振替大阪五五九五〇番

（大阪市北區堂島大阪貯銀三階）

信 通 員 會

白馬へ

吉澤一郎



二年振りで日本アルプスへ来ました。十四歳になる長女と會社の人三人を進れ白馬の大雪山に登り白馬頂上の小屋泊り、翌日は五時三分に御來光を拜み、それから杓子、鎧を経て鑛温泉へ下り二股からバスで大町へ、次いで淺間の西石川で一泊、今朝は櫻ヶ岳に散歩陽は暑いが涼しい風を東屋の上で満喫し乍ら常念や松本平を見渡しました。

クロも大混雑で大部景氣がよかつたらしいです。槍の穂刈さんは一萬尺の天界で毎日避暑をやつてゐるとの事。

之から三時の準急にのるべく驛前の飯田屋で横になつてゐる所です。明後日から社用で水上と谷川の温泉へ重役のお伴で出かけます。(二七・八・一六)

戦線より

佐田泰治

拜啓其後永らく御無沙汰致しました。幹部の皆様には相變らず御元氣の事と思ひます。早く連絡をとらうと思ひながら種々の事情にて筆をとる事も出来ず、遅れまして事を御諒承下さい。私は先般前住地を遠く離れこの方面に来ております。當地方へ参りました頃は日中一四〇—一五〇度の酷暑に相當惱まされたが此頃は朝夕は大分涼しくなり過し易くなりました。參戰以來大した病氣にも見舞はれず益々元氣です。當地方には一ノ倉を思はせる様な興味ある岩壁も多々ありますが敵前とて近くへも寄れないので残念の至りです。疊々たる山の連綿は限りなく昔の夢を呼び血潮の躍動を覺えます。では取敢へず現狀御通知まで。

比島より

月原俊二

拜啓會員諸賢には益々御壯健の御事と遠察申上げます。決戦下公私共に御多忙の御事とお察し致します。秋液く祖國の山色ははるやく彩色に酣、特に會遊の豊後九重山景の狐色に織り出された山肌はこよなく麗しく爽やかに戦野に在る身を暫し忘れて餘に去來するは憶出の山稜、峠、高原、溪、山小屋。又母の懷に歸つたようなくつものいで湯……こうして追憶の泉は盡きそうも有りません。又冷徹師の如き雪冠いたゞく北アルプスの感懷に至つては常夏の中に居て季節の感覺を忘れてかけてゐる兵隊の腦膜に銳利の刃をもつてチクリと痛く刺すものがあります。斯くも美しい岳の追憶をもつ吾身をもつとも倅せであると思郷に在りてしみ／＼感謝せずにはおられません。

バタン半島作戦回顧
イン／＼の砲聲短夜明易き
明易き對陣彼我の砲とどろく
山下りて來て夏夜の月に寝ぬ
夏天いま晝の深さを巨彈飛ぶ
撥架暫しおろして炎天はいを追ふ
露營久し夏夜更くるをパン食みつ
(下略)

(本會の小集會に就て續き)

十三回、第四十七回、第五十五回

(昭和七年六月十二日)と皆香園

に席を取つて、いはゞ皆香園時代といふものを作つたのであつた。

現在會の中堅にある方々は多く

は三會堂時代以後の入會と思はれるが、三會堂で最初の小集會が催

されたのは第三十九回昭和三年三

月十日である。そして三會堂で最

後の小集會を開催したのは第八十

回昭和十二年六月三日である。今

は日本橋商工俱樂部時代ともいふ

べきだが、其處で開かれた小集會

の最初は第八十四回昭和十三年四

月九日であつた。此の三つの時代

(第四回迄は皆香園時代を含む)

を比較して見ると中々面白いのだ

が、此は又の機會に譲らう。

今日迄小集會を場所別に通計し

て見ると次のやうになる。保々近

藤合名會社四回、皆香園三十七

回(臨時茶話會二回共)やまと

一回、三會堂三十三回、清交社十

三回(第六十六回以後の分)、日

本橋商工俱樂部十二回、電氣俱樂部

部新講堂二回、藏前工業會館一回

不明四回となる。勿論此は自分一

個の調査統計で、會の記録とする

には検討を要する事を保留して置

く。

今や大東亞戰爭勃發してより一

年に垂んとし、小集會の改組變貌も氣つかはれる。曰く指導の立場

曰く日本的性格、曰く講演會小

集會か、曰く事務所の一事業か會

の中心機關か。自分としては心底

から山を目標とする我等の小集會

を發展せしめたいとの存念で、こ

んな駄文をも綴つて見たのである

(昭和十七、十、二十五)

山岳第三十七年

第一號内容

再び冠帽峯へ 早大山岳部

雪崩の描寫 勝見 勝

カンチエンジュンガ 吉阪 隆正

登山再編成論 袋 一平

飯豐山頼母木川 二高山岳部

形 山 同

伊豆遠笠山 中村 謙

寶川を下る 吉澤 一郎

其 他

右の通り決定し目下印刷中であ

ります。一月になりそうだと前號

に申上げましたが、一月どころか

三月中にさへ目下の狀勢では危く

なつて來ました。出版印刷の事は

何もかも今迄の常識では理解出來

ない變りようです。何卒今暫く

御待ち下さい。後れては居ります

が必ず立派なものを御手許にお届

け致します。第二號も追かけて發

行の豫定です。紙の入手も最近決

定致しました。

阿蘇岩場の鍊成行

橋本三八

根子岳登山の三十数名の一團を無事下山して當地に送ると、あとは部員十一名、明日の高岳岩登り組だけとなり、既に設置してあるツベツ谷尻の幕営地に入る、交代に設置班は根子岳に向ふ。

三時間もして夕食頃その一行も歸つて来ると、はじめて寛いで、河原の正面、鷲ヶ峰の岩稜に皆の眼と心、焦點はピツタリと合ふ。

河原に廣げた夕食の宴は又各自秘蔵の山海の珍味、闇物(?)も混つて饅腹食つたあげ句は河原に動けなくなる。

古綿のような雲が根子のギザギザの頭に引かゝつてゐたが、バラバラと來た、

「雨!」

相手が悪い——、それが夜中には綺麗に晴れて星が出たと言ふのだ。

午前四時はまだ暗いがテントを抜け出した、食事を手早く片付けると五時には皆テントの前に揃ふ。

「ぢや行つて來るぞ」

夜目にも隆々たるOの千兩の鼻に勝手な冗談を振りかけると、「元氣でやれ」

と送られて賑やかに河原を進む。

これだけの人数(三バアティ十名)で、中には岩登りには全然初心者も居る、それで龍——鷲——北尾根と悪場を選んで縦走するといふのである、危険と言はれるかも知れない——。

昨夜はやはり昂奮してゐた。

しかしその危険をあくまで立派に成し遂げてみせる反撥と、負けるものかといふ敵愾心に似た昂奮であつた、危険に直面しての恐怖ではなかつた。

危険は避けねばならない——戦争の爲めにこそ保存さるべき命である——。

それならば山への闘争に於いての危険の回避とは——、

あくまで成し遂げる自信と、決心と、信頼に外ならぬ。

安慰の道を進むことでは絶対にない筈だ。

アルビニズムの信條は嚴然として不變である。

眞正面に北稜はいま眞赤な榮光だ。

振り返るとどの眼も眞赤に燃えてゐる。

ソーマン瀧に到着した。ツベツ谷の廻行はこの瀧を序幕とする。コルジュ状の岩の間をソーマン

ンのように細い瀧が三段になつてゐる。

先づ朝の挨拶といふ氣輕さで乗切ると上は河原で大瀧との間の懷、兩側はボロボロ岩の壁を立て巡らした——火山灰に浮いてゐる阿蘇の岩——である。その右壁に向つて一班が登攀を試みる。絶叫する落石の音、騒然たるうちに登り切ると、第二第三班が續く。

壁の上部はテラスをなして龍の瘦尾根まで今度はブツシュ帯の掻き分けた。振るい落された極彩色の美しい昆蟲は後で珍らしいオオミズアイであることを知る。

龍尾根の取付きは再びボロボロの腐つた岩を料理するのであるが、後續の班は目もあてられな

い、慘々たる奮闘、容赦なく飛んでくる岩屑と、ゆるみ切つた岩に「此處に登山技術なんてあるものか」

およそリズムカルな登攀なんて貴族趣味だ、登山技術なんて考へ出した者はどこに居る——。

第二第三班はとうとうニヒルに取懸かれた。

それが尾根に出ると、今を盛りのミヤマキシマに、遙か雲表の九重連峰にチロリと忘れて、また元のロマンチストに返つてゐる。

草尾根に一時緊張は解かれたが、戦は緒戦が終つただけだ、樂

観は許されない。

確實に! それより技術は無い。下手は下手なりで、不細工でゐる、確信を持つて。それが阿蘇の岩場の鍵である。

この龍の瘦尾根は鞍部といふ鞍部は崩壊して、空氣の振動でも落ちる岩と、ブツシュの鐵條網、谷はしばらく止まれ落石の音、重んだ空間に幻惑さるゝ不安の神經——。

かくて神經戦とも闘はねばならない。

鼻唄まじりで鷲までは問題にしてゐなかつたのに、此處が最高調の白兵戦になつてしまつた。

「案外に悪かつた」

鷲の頂上に着くと、よくも亂れなかつた、よくも無事であつた九ツの顔から顔を見廻はした。

最後の北尾根——、こそ全コースの主題となつてゐたところだつたのが、今迄の思ひ設けぬ決戦に作戦は一層難がしくつて來た。

第二キレットの懸垂下降と天窓の登攀を、三つのバアティはスムーズに通過せねばならない。

遭難直後といふ悪い條件もある。

按の定足並は亂れかけた——。警戒しろ、此處で亂れたら遭難者の二の舞だ、懸垂のザイルの下

には新しい碑が立つてゐるではないか。

下手は下手なりの確實一本の必勝の決意だ。

幸運であつてはいけない、後味の悪さよりも悪運が連いてゐる。

あ——まどろしい氣持。

それがキレットを通過してしまふと、ナイフリツヂは各バアティともザイルを解いて連續で岩稜を越してゐるではないか——。

いけない!

だが文句は言へなかつた。一分のすきもないではないか。

それでゐるのだと思つた。

火山灰に浮いてゐる阿蘇の岩——今は落石さへ止んでゐる。

はじめてリズムカルな登攀に酔つてゐるのだ。

記録

六月一日 キャンプ出發午前五時龍ヶ峰鞍部六時五十分龍ヶ峰七時卅分鷲ヶ峰八時卅分——九時十分天狗舞臺一〇、〇〇

會報の一色刷

御覽の通り本號から會報は一色刷となりました。創刊以來の二色刷りだつたものですから何とかして續けたいと骨を折つて來ましたが、愈々今度から出來なくなりました(御諒承の程を(編輯部))

小集會記事

關西支部小集會

昭和十七年六月五日午後六時半清交社

大伴 茂氏

山伏の見る山

山伏とは山中で修業する佛者を指すのであるが平安朝以來修驗道が發達して來て修驗道を奉じて山の中で修業してゐる修驗者を山伏と云ふ如く考へられて居る。

修驗道にては山伏は「山は佛なり」と見て居り俗人が山で修業して佛心を得る處であり、俗人が此のまゝの姿で大日如來になれると云ふ信仰を持つてゐる。

夫れ故に山に登るとか山を征服するとかと云ふ言葉は勿體ない事であり之れは「山に入る」と稱したい。

事實修驗道では入峰と云つてゐる之れが修驗道に於ける見方であるが私は修驗道の元祖役の行者の見た山の考へ方が本當の山の見方であると思ふ。

即ち彼の時代は内憂外患の交々あつた時代で彼は國民的忿滿と義憤を抱いて外敵撃攘、民衆救済の二大目的の爲山に入り此處で神を求め神に近付かんとするの念願の下に

神の心を得、神の力を得んとしたのである。

かくて山伏の最初に見た山は神の山であつた。

天孫降臨しました日本の山には神が御住居になつてゐるのだ。

山伏が山で練行するのは大日如來になるのではなく神の心、神の力を得て國を護り民を救はんが爲である、時局下之れは單に一僧侶としてでなく日本人全體が山で行すべきである。

當日の出席者

松尾利夫、橋本晋七郎、砂 徹照、村岸英太郎、金谷伊祐、上田謙之助、吉岡武治郎、伊藤孝一、仁田正義、中尾幸夫、今田忠二郎、近藤貞雄、赤木豊、林利春、畑武雄、山本保、木藤精一郎、塚本強、岡司、西岡一雄、松井久之助、桑原武夫、淺井秀次郎、小倉吉郎、岸田日出雄、土田新一、國府精一、小川正十郎、淺井東一、山口季次郎、佐藤治郎、栗飯原健三。他に會員外五名

關西支部小集會

昭和十七年十月六日午後六時半於清交社今西錦司氏

大興安嶺探檢談

興安嶺探檢史から説き出されたが此處も依然として外人探檢家の

活躍を遙ましく爲に事を述べられたが今次の探檢隊が遙かに彼等に優る成果を収められた事を知つては快哉を叫ばざるを得なかつた。

防禦關係で講師の口は重くはあつたが夫れでも自然學者としての鋭い御觀察も興味深く講演の中に巧みに織り込まれた御話に私達は興安嶺に對する認識も一段と深めた。

ハイラルから漠河まで前人未踏のルートを無電連絡と天測を用ひての探檢であつた。

本探檢に際し危惧された地圖の不完全、食糧補給策、害蟲滋地に對する考慮も一應對策が樹てられ五月十四日ハイラル北方三河を出發馴鹿オロチョンを案内に根河源流に向ふ、河に釣り山に狩して現地補給は豫期通り運び出發當時用意の鹽昆布、梅干、鹽鱈は餘り世話にならなかつた。

英吉里山（一、三〇〇米）を割愛して前途を急ぎ間もなく隊を二分し本隊は馴鹿オロチョンを求めつゝビストラ源流方面から（イ）二十一號地點（圖上の假名）に向ひ途中オヨゴリドイ山に登畢し（バロメーター・六〇〇米）たりしたが地域の關係から夜が短かく睡眠不足、衣服の破損甚だしく修理を要する事、馬を充分休養せしめる必要のある事から三日に一日

は休養をとりつゝ進んだが遂に待望の馴鹿オロチョンには（イ）二十一號地點で逢つた、他の一隊は鹽昆布、鹽鱈を携行して基地に直

行した、七月上旬本隊も基地に入り二隊は合流して夏景色の漠河に到達し本探檢を終る。

御歸京後殊の外御多忙のうちに特に支部の爲め有益な御講演を賜はつた事は感謝する次第であります。

當日は開會に先立ち食堂に於て講師を中心に有志者晚餐を共にした。

（晚餐 出席者）今西錦司、宮崎武夫、栗木九三、山崎彦鷹、津田周二、水野祥太郎、西岡一雄、島田眞之介、小川正十郎、谷口現吉、織田輝雄、妹尾芳郎、近藤貞雄、木下正太郎、森本獎、矢頭猷一、富田健一、栗飯原健三（小集會出席者）晚餐會出席者の外に諏訪多榮藏、原富助、影山寅造、直木重一郎、橋本晋七郎、木藤精一郎、林利春、佐藤治郎、伊藤幸一、中井眞太郎、淺井東一、吉岡武治郎、國府精一外に會員外五名

第百回小集會

十一月十二日（水）於日本商工俱樂部

印度、ビルマ、ヒマラヤの思ひ出

前ラングーン領事

深井龍雄氏

會は定刻を卅分過ぎ兼松幹事の司會にて開會。深井さんは九月末交換船龍田丸で歸朝された少壯外交官です。お話しは氏が幼少の頃から高等學校を卒業なさるまで立山連峰の下富山で過され山好きの御家族の一員として自然に幼い頃から山に親まれた事から始まり大學を卒業されて外務省にお勤めになつて渡英され其の間休暇を利用してスイス其の他の山地に遊ばれた思出から次の任地カルカッタに轉ぜられてからは御多忙な公務の餘暇に印度政廳夏季所在地のシムラ邊からヒマラヤの山々を眺められた印象、轉じてシキムやネパールの風物、或はカシミール地方の旅談、グルナールからナンガパルバットの眺められた印象、さらに轉じてガルワール地方を歩かれたお話等その折々に撮られた寫眞を手指示されながらと言ふよりは寧ろ深井さんは御自身廻想なさりつゝ山の印象の間に公務ネパール王國へ出張なさつた折玉様の虎狩に参加された話とか、シムラで印度の王様のお姫様から親しく民譚を聴かれたり、ネパール人が非常に日本人に似てゐて話すにつけ聴く

につけ他民族と話す場合とちがつて敬虔な氣持になられたと言ふ事等を面白く或はしみじみと話された。ヒマラヤの諸山を眺められた印象を話される時には其の山姿がすばらしく雄大で崇高の念を感じざるを得ぬと言ふ事を繰返し言はれた。お話は後段に入り昨年八月東亞の情勢緊迫の最中氏がヒルマに轉任せられてから談たま／＼山を離れ大東亞戰爭勃發以來生々しく彼の地の諸事情に及ぶ氏の語調は熱を帯びて二世紀に亘る英國の壓政、それに對する現住民の動向印度教徒と回教徒の問題等御役目柄とは言へ話される事毎がひし／＼と聽者の胸にひびく。惜しくも閉場のベルに聽了出來なかつた事は聽者にもより折角お話下さる深井さんにも残念な事であつた。

當夜の聽衆は小集會に稀にみる多勢で若い方が方々つたのは演題の然らしむる結果と考へられる。登山を念頭に置いてヒマラヤに思ひ寄せて來聽された方々には幾分もの足らなかつたとは思はれるがとまれ國を擧げての此の戦ひの使命としてその伸展如何によつては日本のヒマラヤ遠征が夢ではなく現實に可能であると思はれるにつけ深井さんの後段のお話は未だ見ぬヒマラヤの山にのみあこがれる

心にグサツとさゝれる何ものかを感じたのは筆者ばかりではなかつた事と思ふ。

深井さん御自身お撮しになつた澤山の寫眞を御持参になつたが會場の都合、時間の餘裕がなかつたので親しく拜見出來なくて残念であつた。(交野生)

來會者 深井龍雄、塚本繁松、山崎和一、名須川渡、山口京一、横有恒、小原勝郎、神谷恭、沼井鐵太郎、瀬戸強三郎、淺原重繼、交野武一、農大山岳部野内藤吉外四名、東大山岳部高須正郎、高木菊三郎、折井健一、飛川維之、新庄球生、松野節夫、江口佳之、中島卯三郎、田邊主計、山根雅男、關根吉郎、松岡紳一、後藤正彦、田邊文一郎、青木正雄、上田勇五、佐藤隆太郎、増永次夫、吉田竹志、福田嘉四郎、中野周雄、佐々保雄、高見定吉、山下助四郎、鈴木弘、佐藤誠次郎、日大山岳部宮本幸男外七名、山口一郎、西崎一郎、井上英夫、小野友次郎、山田明吉、飯塚篤之助、安藤武、武田久吉、菅見修丞、茨木猪之吉、兼松學、小合正勝、風見武秀、石原憲治、堀田彌一、矢田城太郎、谷本弘、鳥山悌成、會員外約三十名

第一回有志懇談會

昭和十七年十月四日(日)午後

一時から麹町區清水谷公園内の皆香園で第一回の有志懇談會が開かれた。

先づ發起人中の世話人の一人沼井鐵太郎氏の挨拶がある。其れによると、近頃本會の日本橋商工俱樂部での小集會では會場時間の關係上講演後の質問や自由討論といつたものや會員相互の親睦知識交換等の懇談座談が思ふやうに出來ない事が動機となつて、寄り寄り座談気分満溢の皆香園時代を慕ふばかりか復活實行したいとの希望が強くなつた。かくて本年八月六日本會事務所に於て世話人神谷、岩永、沼井三氏打集合、八月十六日發起人會を開く事になつた。當日は蒸暑い日であつたが、皆香園の一室に集まつた鳥山、飯塚、野口、神谷、岩永、沼井諸氏、旅行又は事故の爲不参加の他の發起人茨木、冠、木暮、高頭、高野、武田、横諸氏の全的賛成意見に力を得て開會の準備打合をした。

八月二十日本會の役員會に於て沼井氏は發起人兼役員の一として有志懇談會を説明、現任出席役員の了解を求めた。次いで八月二十七日及び九月三日世話人三人は本會事務所又は第一ホテルで集合打合、九月七日冠、岩永、沼井三氏新橋附近甚兵衛にて打合、之と前後して神谷氏は木暮、武田兩先

輩を訪ねて種々打合、最後に九月二十三日本會事務所で岩永、沼井兩氏集合、神谷氏作製の通知狀を塚本主事の助力を得て發送する迄の運びとなつた。有志とはいふものの發送先には基準がある。第一皆香園時代に小集會に五回以上出席者を主とし之に現任役員及有志なる皆香園時代の懐古のみであつてはならない、時代の違ふ人々の一堂一心になる會であり、又この會合が日本山岳會の一つの推進力たらしむ事を切望するのである。

出席者 冠松次郎、伏見鎌次郎、田邊主計、柴山登茂次、冠郁夫、松本善二、岡野徳之助、關根吉郎、横有恒、小野友次郎、茨木猪之吉、鳥山悌成、武田久吉、野口末延、木村鑽吉、吉田竹志、大熊保夫、交野武一、中司文夫、塚本繁松、木暮理太郎、高頭仁兵衛、神谷恭(世話人)岩永信雄(同上)沼井鐵太郎(同上)計二十五名。(世話人報)

定款改訂取やめに就て 前號會報本年度通常總會に於ての決議のうち、定款改訂に關する事項二件(終身會費變更、總會召集日時の変更)は厚生省の意見もあり、認可願を取下げ改めて審議の上提出する事になりましたから何卒御了承下さい。

二、吉野、熊野の山と溪 三、尾瀬の今昔 武田久吉氏 右兩氏講演はいづれ何か書いていたゞけると思ふので茲には書かない。只兩先輩共昔に變らぬ元氣

會員 山添 直一氏

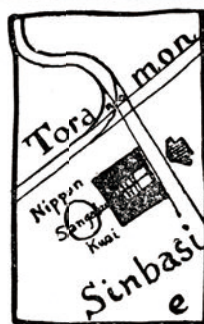
山添直一氏（大正四年九月入會會員番號四一五番）は今年四月六日逝去されたる旨遺族の方から後れて通知があつた。享年五十五歳。本會は貴重なる會員を失つた事を痛惜し深く哀悼の意を表す次第である。

會員 山口 成一氏

山口成一氏（大正五年十一月入會會員番號五〇〇番）は急病の爲十一月八日逝去された。氏は工學界に活躍され本會の爲にも多く盡力下さつた方であつたが俄かの計報に接し痛惜の念にたへない。本會は塚本主事を告別式に派し深く哀悼の意を捧げた。享年五十歳

會員 酒井 忠一氏

子爵酒井忠一氏（明治四十二年八月入會會員番號二二七番）は舊上州伊勢崎藩主で、本會々員としても極めて古い方であり、會に對しても中々熱心な方であつたが、遂に病氣の爲に十一月二十二日逝去された。享年五十六歳。つひ最近の小集會にも出席され、あの元氣な賑やかな聲がまだ耳底に残つてゐる程なのに今回の計に接し哀惜の念切なるものがある。本會は謹んで哀悼の意を捧げたい。



會務報告

九月常務役員會報告

九月十七日午後七時於事務所開催
出席者 横、高頭、沼井、中司、小原、兼松、金山、織内、田邊、塚本
委任 木暮外十二名
議長 榎理事

議題
一、小集會ノ件
九月下旬歸朝ノ深井ラングリン領事ニ印度ヒマラヤ方面ノ講演ヲ依頼ス事トシ交渉ハ兼松幹事、會員山田明吉氏ヲ煩ハス事トス
一、秋季講演ト映畫ノ會ノ件
映畫入手不可能ノ狀態ニ付一應中止ノ事尙講演會ニ付テハ別ニ考慮スル事
一、山日記編輯方針ノ件
大體前同通りトス
一、地形圖發賣制限ニ關スル件
一、山岳編輯委員委屬ノ件
小原幹事ヲ編輯名儀人トシ、田邊主計氏、初見一雄氏ヲ編輯委員ニ委屬シ第三十七年一號ヲ編輯

十月常務役員會報告

以上

十月二十二日午後七時於事務所
出席者 鳥山、高頭、茨木、沼井、木村、金山、織内、小原、吉澤、塚本
委任 木暮外十名
議長 鳥山理事

議題
一、會費變更ノ件
一、山岳、山日記ノ編輯報告
一、小集會ノ件
一、役員總會ノ件
十一月十三日開催ノ事トス
以上

役員總會報告

以上

十一月十三日午後六時於事務所
出席者 木暮、横、鳥山、高頭、木村、交野、小原、兼松、塚本
委任 小島、武田、加藤、冠、中司、藤島、沼井、額田、榎谷、津田、今西、三木、栗飯原、富田、角田、織内、茨木
議長 木暮會長

議題

一、會費變更ノ件
印刷費ノ平均至六割、郵税ノ倍額以上（市内郵、便市内小包ノ廢止ノ結果本ニ取リテハ右ノ結果トナル）其他諸物價ノ高騰ノ結果止ムヲ得ザル支出ノ増加避ケ得ザ

ル理由ヲ認メ明年度ヨリ通常會費ヲ變更スル事トス但シ二回分納ヲ認ム
終身會費ハ二百圓以上ニ、入會後滿十年以上經過シタル會員ニハ百五十圓以上ニト變更スルコトトス

一、山岳年鑑刊行ノ件
十分検討ノ事
一、本年度總會決議中不認可ノ件
本年度通常總會決議中定款變更ニ關ル部分ハ都合ニヨリ認可願取下ゲノ事トス
一、其他
以上

臨時常務役員會報告

以上

十一月二十一日午後二時於事務所
出席者 木暮、横、鳥山、小島、高頭、中司、茨木、交野、織内、田邊、塚本
委任 六名
議長 榎理事

議題

一、最近起リツツアル問題ニツキ對策ヲ協議セリ
一、本會々員章ヲ更改スルコトアリトセバ、舊章ヲ再度採用スルコトトス
一、其他
以上

六月關西定例役員會

六月二十六日於關西支部ルーム

出席者 富田、西岡、小川、直木、栗飯原

一、夏期山岳研究講座報告ノ件
一、同講座出版に關する件
一、冬期山岳研究講座開講ノ件
一、南方山岳研究會組織ノ件
富田幹事より過般開催の夏期講座盛會裡に終了したる旨報告あり本講座速記に基き出版の件は朋文堂の承諾あり正式交渉を爲す事に決定す

冬期講座は各方面よりの要望もあり十一月頃開講の豫定の下に諸準備に着手する事とす

九月關西定例役員會

九月四日於關西支部ルーム

出席者 中原、津田、富田、小川、木藤、西岡、栗飯原

一、夏期山岳研究講座會計、庶務報告ノ件
一、冬期山岳研究講座開講ノ件
富田幹事より夏期講座會計報告あり二、三希望條件を述べ承認、次で冬期講座の講師並に演題につき再研討を加へて大體決定し直ちに各講師に交渉する事とす
（七・八月役員會開催せず）

昭和十八年版 山 日 記

- ◇ 山日記の新版が発行されます
- ◇ 内容は昨年と大體同様ですが、山小屋、山案内、登山團體に大増補改訂を加へました
- ◇ 巻頭には自信ある寫眞を挿入しました。
- ◇ 紙質も依然上質紙を使用致します
- ◇ 印刷所の多忙の爲出来上りは三月末となる様です。定價は一圓五十錢送料八錢ですが、發行後一ヶ月以内に限り會員には左記の値段でお頒ち致します
- ◇ 二冊に付（送料共）一圓三十錢の割合
- ◇ 御送金は必ず振替貯金でお願ひ致します。口座番號は東京四八二九番であります

塚本 閣治 【日本山岳寫眞書】4編 奥 日 光

國立公園「奥日光」の眞價は
塚本氏の新鮮なスチール百餘
葉に依つて益々發揮された。

塚本閣治氏筆原色版
「夏の光徳沼」

定價 二圓 (送十二錢)

案内記事 矢 島 市 郎

1 雲龍峽 2 華嚴溪谷
3 太郎山 4 奥拜の秘爆
5 白根山 6 奥鬼怒温泉郷
7 鬼怒沼 8 金越丸沼
9 スキーの山王越 10 三階瀨
から富士見峠 11 日光表連峯

山と溪谷社編 登山講座 第五卷

スキーと山のことなら何でも解る綜合的大講座愈々完成近
し。第五卷は春の登山、ハイキング、詩歌、技術をもる。
各冊二圓二〇錢 (送十五錢) 全六卷十三圓二〇錢 (送共)

既 刊	塚本 閣治 奥 秩 父 (日本山岳寫眞書 1) 1圓80錢 (送12)
	塚本 閣治 白 馬 岳 (日本山岳寫眞書 2) 1圓80錢 (送12)
	塚本 閣治 雪の上信國境 (日本山岳寫眞書 3) 1圓80錢 (送15)
	山と溪谷社 登山講座 (第 1 卷) 2圓20錢 (送15)
近 刊	山と溪谷社 登山講座 (第 2 卷) 2圓20錢 (送15)
	山と溪谷社 登山講座 (第 3 卷) 2圓20錢 (送15)
	山と溪谷社 登山講座 (第 4 卷) 2圓20錢 (送15)
	中村 謙 東京附近雪艇の旅 1圓60錢 (送15)
近 刊	塚本 閣治 槍ヶ岳へ (日本山岳寫眞書 5) 2圓 (送12)
	塚本 閣治 丹澤山塊 (日本山岳寫眞書 6) 2圓 (送12)
	塚本 閣治 冬の蔵王 吾妻 八甲田 (日本山岳寫眞書 7) 2圓 (送12)
	山と溪谷社 登山講座 (第 6 卷) 2圓20錢 (送15)
近 刊	川崎隆章 岳(たけ)名家山岳隨筆集 3圓50錢 (送20)
	猪谷六合 赤城の四季 (山岳寫眞書) 10圓 (送30)
	安齋 徹 東北の山旅 (山岳科學と案内)
	山と溪谷社 山の湯旅 (全日本の山の湯案内)

東京市芝罘 山と溪谷社 振替東京 60245番
出村町 6-4 電話 芝 548番

編輯後記

前年當會の講演會で講演者(會員)が「日本山岳會では何か依頼された時に嫌とは言はぬことになつてゐる」と言はれたことを思出し私もその精神に従ふことにしました。私自身時間の足りないことやその他のことで適任とは思つておりませんが、會員の力によつてこの昭和五年以來十二年以上續いてゐる事業を進め私に與へられ

た任務を果したいと存します。山登りには先づ山の在ることが必要なやうに、會報の刊行にはまづ原稿が必要ですから、宜敷く御願ひ申上げます。第一二〇號は私が組立てました。原稿の足りない所をやつと都合して豫定の頁數にしましたが御覽のやうに片よつたものになりました。その他いろいろ不備の點をもお呼び申上げます。

(田邊主計)

昭和十八年 2月25日 印刷納本
昭和十八年 2月28日 發行

頒價 二〇錢

日本山岳會内
編輯者 田邊 主計
發行所 塚本 繁松
發行所 日本山岳會
振替東京 四八二九
東京市芝罘 出村町 六三三
印刷所 丸ノ内新聞社
(東京一〇八二)

東京市神田區淡路町二ノ九配給元
日本出版配給株式會社

キスリング型(E)式

ルックザック

御手元にある布地御持参になれば
御作り致します

山とスキー具専門

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(33)三三二〇番
授替口座東京九一一八四番

